

みやぎ街道交流会

第2回交流大会 **in 加美**

～ 加美地方から見える東北～



報 告 書

目 次

■ あいさつ	-----	1
■ 基調講演・鼎談	-----	3
◆ 基調講演		
● 奈良～平安前期における朝廷の蝦夷政策について	-----	4
● 加美地方の東山官衙遺跡や城生柵跡などの遺跡の概要と そこから見える朝廷の蝦夷政策の役割等について	-----	6
● 大野東人が切り開いた色麻柵から大室塞に至る いわゆる「玉野新道」について	-----	8
◆ 鼎 談	-----	11
■ 活動報告	-----	14
■ パネル展・街道談義	-----	17
■ 街道探訪会	-----	18
■ 参加者の状況・アンケート結果	-----	20

◎主催 みやぎ街道交流会

◎共催 最上海道研究会

◎協賛 (社)東北建設協会 (みちのく国づくり支援事業)

◎後援 あおりかいどう会議・いわて街道交流会・すみだ街道倶楽部・くりはら街道会議・
三宿地域連携協議会・ふくしまけん街道交流会・NPO 法人奥州街道会議・羽州街道交流会・
とうほく街道会議・大崎ケーブルテレビ・KHB 東日本放送・TBC 東北放送・仙台放送・
ミヤギテレビ・NHK 仙台放送局・大崎タイムス社・河北新報社・朝日新聞仙台総局・
毎日新聞仙台支局・読売新聞東北総局・加美町・加美商工会・宮城県・
国土交通省 (仙台河川国道事務所・鳴瀬川総合開発調査事務所)

プログラム

10/2
[土]

【第1部】交流大会 加美町中新田交流センター [多目的ホール]

1. オープニングセレモニー 13:00~13:20

主催者挨拶 みやぎ街道交流会 会長 高倉 淳
共催者挨拶 最上海道研究会 会長 吉岡 博道 氏
来賓挨拶 加美町 町長 佐藤 澄男 氏

2. 基調講演・鼎談 13:30~15:30

『東山官衙遺跡など加美地域の遺跡や玉野新道は、何を語るのか』

元宮城県多賀城跡調査研究所 所長 白鳥 良一 氏
加美町教育委員会 係長兼学芸員 齊藤 篤 氏
みやぎ街道交流会 事務局(聞き手) 安藤 美樹 氏

(休憩 15:30~15:45)

3. 活動報告 15:45~17:15

『街道をめぐる取り組み報告』

最上海道研究会 (加美町) 藤井 慶吾 氏
軽井沢越大室研究会 (村山市) 平山 繁 氏
くりはら街道会議 (栗原市) 二階堂 秀紀 氏

4. 街道パネル展

多目的ホールにおいて「街道関係パネル」を展示

【第2部】街道談義 加美町中新田交流センター[食堂ホール] 加美地方の郷土料理と県内地酒による交流会 18:00~20:00

10/3
[日]

【第3部】街道探訪会

Aコース 軽井沢越最上海道 8:30~16:30

[案内者：吉岡善太郎氏・渋谷富士雄氏（最上海道研究会）]

中新田交流センター発 ⇒ (バス移動) ⇒ 漆沢・山神社口 ⇒ 高畑山
⇒ 長沼林道駐車場(昼食) ⇒ 名月峠 ⇒ 軽井沢番所跡 ⇒ 天沼 ⇒
上野畑・林道口 ⇒ (バス移動) ⇒ 中新田交流センター着

Bコース 東山官衙遺跡と関連遺跡 8:30~12:30

[案内者：齊藤篤氏（加美町教育委員会）] ※全行程バス移動

中新田交流センター発 ⇒ 河岸端(車中説明) ⇒ 中新田城跡 ⇒
城生柵跡 ⇒ 賀美石地区公民館 ⇒ 東山官衙遺跡・壇の越遺跡 ⇒
松本家住宅 ⇒ 中新田公民館(昼食) ⇒ 中新田交流センター着



会場の中新田交流センター



会場案内板

主催者のあいさつ

みやぎ街道交流会 会長 高倉 淳



本日は、県内外の各地から多くの方々にお集まり頂きまして、お礼申し上げます。

みやぎ街道交流会が発足したのは、平成19年5月でしたので、今年で足かけ4年という事になります。

その年11月、第1回の交流大会「in 栗原」を栗原市で開催し、大いに盛会でした。

これをきっかけに、栗原では、色々な活動が続けられております。例えば、栗原市若柳有賀の農家に伝わる150年前の料理に関する古文書「大秘方萬料理方全」を解読、研究しまして、その料理を地元の奥さんたちが再現し、地域の食育や地域づくりのプロジェクトへと繋がりました。

また、昨年12月の雪が降る中、栗原の方々と一緒に計60名で、奥州街道の刈払いを行いました。これまで篠竹などが密生して歩けなかった藪道が快適に歩けるようになるなどの活動が行われました。奥州街道によるこれからの街道ツーリズム事業を非常に楽しみにしているところです。

このように、これまで栗原や七ヶ宿など各地で、街道の歴史やネットワーク性などを生かした様々な活動を実施してまいりました。

いよいよ本日は、第2回目の交流大会が加美町で開催されます。この加美地域は、歴史の宝庫です。掘り起こせばいろいろな分野でキラキラと光るものが沢山出てまいります。しかも、ここには、この大会を共催する「最上海道研究会」という熱心な街道の組織もあります。

先日、行政トップである町長さんからお手紙を頂きました。その中にあった「町おこしの基礎は、歴史を正しく理解することである」との一行を読んで、私は非常に感激いたしました。このような意識を持った行政と民間の方々とが一体となった地域づくりが、これから始まることに喜びを感じております。このように、街道のイベントが地域づくりのきっかけとなる非常にタイミングの良い地域でもあります。

私は、日頃から思っておりますが、何かに関心を持つといろいろな疑問が起こり、興味が沸いてきます。そして、疑問あるいは興味を持つようになりますと、やがては活動が始まります。流れは“関心・興味・活動”です。そして次に、仲間づくりが行われるようになります。

このように街道などを通じて何かに関心を持つと、地域の歴史がますます輝き、浮かび上がってくることになると思います。ここにお集まりの方々がそれぞれ核になり、これから一緒に手を携えていきたいと思っております。

最近、街道ブームといわれるくらい街道を歩く人が多くなりました。これを地域づくりに生かすため、みやぎ街道交流会として、いろいろとお手伝いができることがあればと考えておりますので、これからもよろしくお願い致します。

共催者のあいさつ

最上海道研究会 会長
吉岡 博道 氏

本日は、地元はもとより、県内外各地からたくさんご参加を頂きました。心から歓迎申し上げます。

本日のテーマは、「加美地方から見える東北」という、大変大きなものになっております。

加美町には、奈良時代から平安時代前期にかけ、多賀城国府と密接な関係があった東山官衙遺跡、檀の越遺跡、城生柵跡、名切谷廃寺跡があります。

また、軽井沢越最上海道、田代街道、寒沢道と、山形へ行く街道が3本もありました。それぞれに番所が設置されまして、多くの人馬が行き交いました。古代には軍用路として、それ以降は、人や物資が行き交う交易の道や湯殿山参詣の道として大いに賑わったのですが、明治以降は役割を終え、人々の記憶から消えようとしていた道でもあります。

このような中、地元の歴史研究家である本田一郎さんが、長年の調査研究を経て、平成19年に『蘇れ！最上海道』を発刊し、最上海道が注目されるようになってきました。

我々は、正確な歴史認識をもち、この素晴らしい貴重な遺跡や街道を守り保存し、後世に伝えていく使命があると思っております。

平成16年、熊野古道が世界遺産に登録されたこともあり、全国的に古道ブームがやって参りました。それがただのブームに終わらないよう、しっかり足下を見据え、地道にこれからの活動を進めていかなければならないと思っております。

その様な意味におきまして、今回の大会がそれぞれの組織、参加の皆様お一人お一人にとって、有意義な開催となりますようご祈念申し上げます。また、大会運営がスムーズに行われますよう皆様のご協力をお願い申し上げます。



来賓あいさつ

加美町 町長
佐藤 澄男 氏

本日は、県内外から、この加美町にお越しいただきまして、心から歓迎申し上げます。

我々が生き、活動して行く時、その原点をどこに見出すかということは、最も尊重すべきことと思っております。

そのような意味で、家庭にあっては父親、おじいさん、おばあさんから学びとる。あるいは地域の古老の話に耳を傾けるといったことが非常に大事な時代になってきたと考えております。戦後、経済的な面を追及するあまり、心のよりどころを失ってきたのではないかと、最近の事件、ニュースや政治経済問題を見るにつけ、深く感じているところであります。

したがって、自分たちの先祖は、あるいは先人たちは何を残したのか。そして、その時代にどのような社会を望んだのであろうかといったことを考える時に、街道をとおした交流というものがあるわけであり、当然あったわけであり、いま街道は、県単位で区切られているわけですが、それを越えた物的交流、人的交流、さらにそこから得る文明や情報の多彩さ、こういったものが、地域の人たちに少なからぬ影響を与えたことは間違いないと思っております。

この会場のある下新田は鳴瀬地区といいますが、ここに四日市場という集落があります。そこにはかつて川港があり、鳴瀬川舟運の拠点でもありました。街道と舟運の関係を考えますと、この大会がこの地区で開催されることに浅からぬ因縁を感じるわけでございます。

本日は、皆様方の情報交換はもちろんのことですが、これからの町づくりや地域の在り様を考えると、この街道のもつ意味合いをしかと認識されまして、お互いの交流がさらに深く、強いきずなで結ばれますことをご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。



『東山官衙遺跡など加美地域の遺跡や玉野新道は、何を語るのか』

奈良～平安前期、朝廷の蝦夷政策として加美地方に設けられた東山官衙遺跡などにみられる城柵官衙や、天平9年に大野東人が切り開いた色麻柵から大室塞（尾花沢市）に至るいわゆる「玉野新道」は何を物語るのか？

また、現代の我々はこれらから何を学び、これからの地域づくりにどう活かしていけるのか…。

講師等及びプロフィール

○ 白鳥 良一 氏



1946年生。宮城教育大学卒。仙台市教育局文化財課長、宮城県多賀城跡調査研究所長、宮城県教育庁文化財保護課長、東北歴史博物館副館長などを経て、現在、尚絅学院大学・東北生活文化大学講師、(社)宮城県芸術協会事務局長、みやぎ街道交流会顧問。専門：東北古代史の考古学的研究。縄文土器、土師器・須恵器の研究。

○ 齊藤 篤 氏



1972年生。東北学院大学文学部卒。宮崎町教育委員会社会教育課学芸員を経て、現在、加美町教育委員会社会教育課係長兼学芸員。専門：東北古代史の考古学的研究。土師器・須恵器の研究。

○ 安藤 美樹 氏（聞き手）



岩手県立大学総合政策学部卒。岩手県内を中心にグリーン・ツーリズム、コミュニティビジネスを支援、平成18年6月のNPO法人奥州街道会議設立から街道に携わり、平成20年11月開催のとうほく街道会議仙台・宮城大会基調鼎談に出演。現在、同NPO法人事務局次長、みやぎ街道交流会事務局。街道を生かした地域コミュニティビジネス創設を中心に東北で活動。

趣意説明

(安藤 美樹氏) 歴史学は未来学とも言われますが、地域づくりを考えると、地域の歴史をしっかりと学び考える必要があると思います。東北地方において歴史を学ぶ時、「奈良や京都との類似性を探すだけでなく、北からの視点から見えてくるものがある。また、広く・大きな視野から正しく位置付ける必要を感じている。」と元東北歴史博物館館長の故工藤雅樹先生から教わりました。

東北の歴史を考えるうえで重要なテーマを3つあげれば、1つ目が“奈良から平安前期における朝廷と蝦夷の攻防の時代”、次に“前九年、後三年の合戦から奥州藤原の時代”、そして3つ目が“幕末からの戊辰戦争”と言われます。

本日の開催地である加美地域は、この1つ目のテーマに関し、とても意味深い所とお聞きしています。この基調講演・鼎談は、3つの講演と意見交換の4部構成で進めたいと思いますが、講師のお二人は東山官衙遺跡や、古代史の常識を覆す大発見と評価された壇の越遺跡の発掘調査などにも関わっていますので、興味深いお話が聞けると思います。

はじめに

私は長い間多賀城跡調査研究所に勤めておりました。昭和62年、多賀城に関連する遺跡として東山官衙遺跡を取り上げ、第1回目の発掘から2、3年間担当者として関わりました。

この講演では、現在のところ考古学でどのようなことが分かっているのかについて、私の考えを交えながら話させていただこうと思っています。

7,8世紀の東北地方

ご存知のように古代の東北地方には蝦夷と言われた人たちが住んでおり、大和朝廷の律令国家の範囲に入っている地域と、入っていない地域がありました。その領域に入っていない地域を国家の領域に取り込む政治的な動きが、いわゆる蝦夷征伐といわれるものです。蝦夷征伐といってしまうといろいろと語弊がありますが、その中身は多様です。

大化改新のころ、初めて陸奥国という行政区画が置かれ、大崎地方まで、律令国家の範疇に入ってくることとなります。それ以前の古墳時代の終わり頃は、阿武隈川流域ぐらいまでが大和朝廷が支配する範囲で、最前線として今の仙台市郡山に官衙が置かれ、ここが東北の蝦夷政策を推し進める中心でした。

その後、蝦夷と呼ばれた人たちとの抗争が起こり、拠点として多賀城が造営されます。8世紀前半の多賀城を中心とした北の蝦夷政策範囲は、この大崎平野まででした。それから蝦夷政策が北進し、栗原郡が出来るのが西暦767年です。栗原郡が出来てもまだまだこの地域は不安定でしたが、坂上田村麻呂が胆沢城をつくり、北上川の中流域を律令国家の支配地に収めました。ちなみに、紫波城・徳丹城を造るのが延暦22年(803)で、盛岡のあたりまで支配が及びました。

多賀城は陸奥国の国府でしたが、蝦夷政策のため鎮守府も置かれ、広域行政監察をする按察使が陸奥国だけではなく、出羽国の行政、軍事まで管轄していました。多賀城が出羽国の鶴岡や酒田、それから秋田あたりまで管轄をしていたということを前提にこの地域を見ていく必要があると思います。

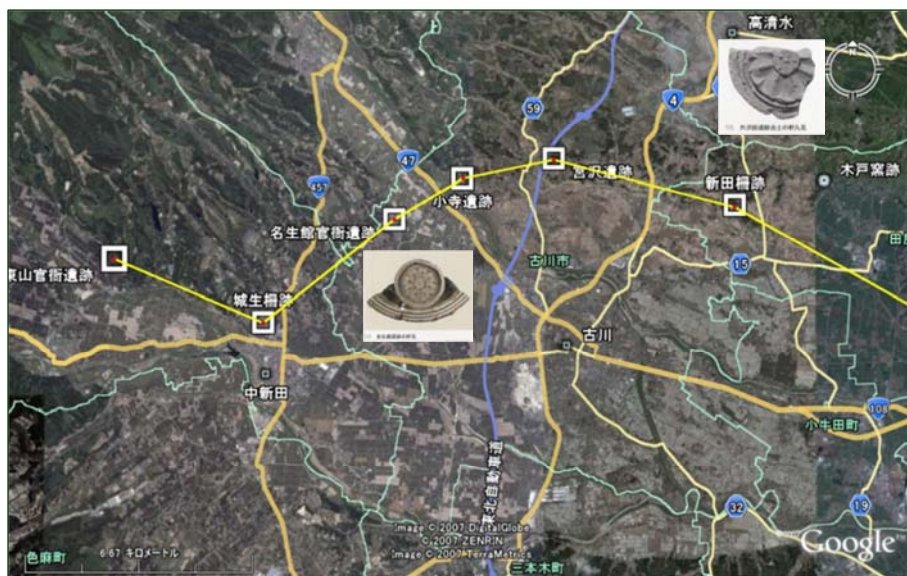
7,8世紀の大崎平野の歴史というものを考えた場合、陸奥国の成立後、いちはやく律令制下にこの地域が組み込まれました。それを仮に西暦660、670年ぐらいとしますと、その後、栗原郡が出来るまでの約1世紀にわたってここが蝦夷との国境地帯だったという位置づけになります。実際に『続日本紀』など当時の文献を見ますと、この地域は賊と境を接する状態にあり、政情はいつでも不安定で、奈良時代は不安な状態が続き、平安時代に入っても様々な事件が起きているという地域です。

それに対して律令国家は、関東とか福島などの安定した地域からたくさんの移民を蝦夷の居住地に移住させました。帰降してきた蝦夷を他の国に住ませることと併せて、地域を安定させる政策をとってきたといえます。反面、前から住んでいた蝦夷からすると、これまで平和で魅力的な耕作地を取り上げられるわけですから、こういった政策に対して反発が生まれました。かつて、東北はろくに米が取れない所なので、そこに大和朝廷が多くの移民を入れ、新たに開発したというストーリーで語られていたのですが、たくさんの移民を入れるということは、そこは魅力的な肥沃な土地だったことに他ならないと私は考えています。

そのような政策に対して蝦夷の人たちは激しく抵抗し、養老4年(720)、陸奥按察使の上毛野広人を殺害する事件が起こりました。その直後にも蝦夷の反乱があり、政府は征夷軍を派遣してこれを鎮圧しましたが、しばらくはこの地域が不安定になり、律令国家は仙台市郡山にあった国府を多賀城の地に移します。それが多賀城創建の位置づけであると、考えられています。

宮城北西部の城柵官衙遺跡

国府多賀城を造営して、大崎平野の周辺に玉造柵、新田柵、牡鹿柵、色麻柵など5つの柵を配置したと文献にあります。しかし、そのうち1つの柵の名前が書かれていないため、長い間議論されてきましたが、最近では東山官衙遺跡に置かれた賀美柵だったのではないかと考えられています。



宮城北西部の城柵

大崎平野の城柵官衙は、東山官衙（ひがしやまかんが）遺跡が一番西側ですが、東に向かって城生柵跡（じょうのさくあと）、名生館官衙（みょうだてかんが）遺跡、小寺遺跡、宮沢遺跡、新田柵跡、さらに東側に牡鹿柵跡と各遺跡が大崎耕土の北と西側を囲むように、一定間隔で並んでいます。時代がすべて同じではありませんが、短期間に蝦夷政策を行うための軍事施設が置かれるのは、この地を律令国家が重

要視していたことの表れだと思います。

昭和49年に発掘された宮沢遺跡ですが、これは私が最初に発掘を担当した城柵遺跡です。調査が進むと1辺が1,440mにも及び、古代東北最大の城柵だということが分かり、大きなニュースになりました。この遺跡をどのように理解したら良いか、発見当時ずいぶん悩みました。今では、8世紀後半、蝦夷との攻防が非常に厳しい状態になった時の玉造城ないしは玉造柵ではないかと考えております。

中新田の城生柵跡は、当時の中新田町長さんが「この史跡を調査で解明して、しっかりと町民のなかに位置づけたい」ということで、昭和52年に調査を始めました。残念ながら政庁は不明でしたが、北辺の築地塀や門、多くの倉庫があったということは分かっております。今では、色麻柵ではないかと考えております。

767年、新たに伊治城が造られ、その翌年に栗原郡が建てられました。ようやく大崎平野より北に郡が創られ、律令国家の範疇に取り込まれるわけです。宝亀11年(780)、伊治公皆麻呂(いじのきみあざまる)が反乱を起こした時の火災痕跡が発掘されています。

名生館官衙遺跡は、伊治城跡に引き続き、多賀城跡調査研究所が昭和55年から発掘調査しました。多賀城よりも古い時代の役所の跡で、奈良時代から平安時代まで何度も使われています。多賀城より古い時代は玉造ないしは丹取(にとり)といわれていた評家(ひょうけ)の跡だと考えております。

東山官衙遺跡は、ちょうど私どもがこの古川の名生館官衙遺跡を発掘していたころ、郷土史家の板垣剛夫さんという方から「鳥嶋の畑から、おっきな石が出てきた、瓦や古代の土器もたくさんある」と教えられ、私が担当して昭和62年から発掘調査を行いました。その結果、素晴らしい成果が出ました。倉庫群の跡が並んでいて、大きな石は礎石(土台石)だったことが分かりました。この遺跡からは、次々と非常に保存状態の良い遺構が発掘され、全国的にも注目を集めました。

新田柵跡は、大崎市の田尻にあり、平成元年に発掘調査しました。多賀城と一緒に新しく作られた柵にほぼ間違いはないだろうと言われていました。政庁は不明ですが、築地塀とか門跡が発見されました。

まとめ

このように年代順に並べましたけど、掘れば掘るほど、立て続けに新しく素晴らしい遺跡が見つかるということで、東京はもちろんのこと、関西の研究者とか、遠くは九州の太宰府なんかを研究している人たちも、研究成果の様相を知るため、毎年行っている調査研究会にたくさんの方が来ております。6か所のうち5か所はもう史跡指定になっていますが、史跡というのは全国的に見ても、我が国の歴史文化を解明する上で重要な遺跡です。こういう前段の話をもとに、齊藤さんにバトンタッチします。

[図出典] 講演資料から抜粋。

講演Ⅱ

(テーマ) 加美地方の東山官衙遺跡や城生柵跡などの遺跡の概要とそこから見える朝廷の蝦夷政策の役割等について

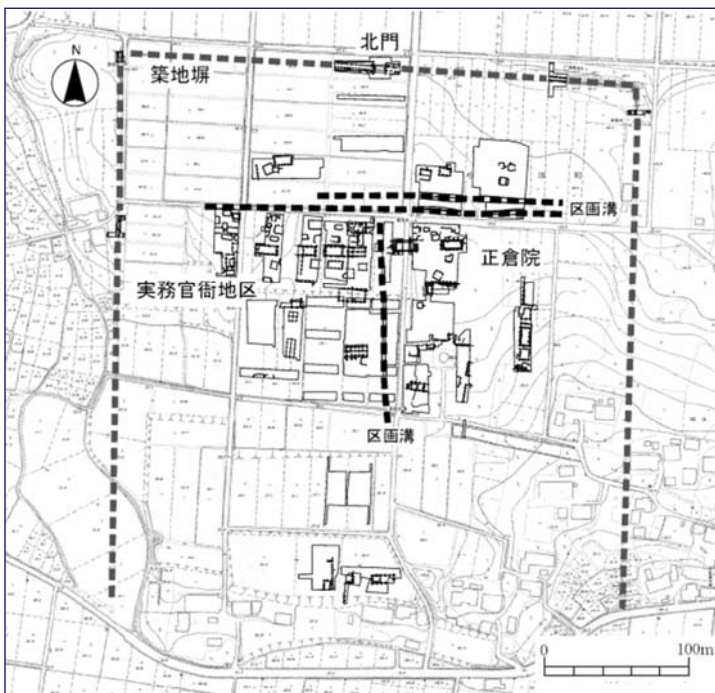
(講師) 齊藤 篤氏

はじめに

私からは加美町内にあります2つの遺跡、東山官衙(ひがしやまかんが)遺跡と城生柵跡(じょうのさくあと)をより詳しくご説明したいと思います。本日の会場になっております中新田交流センターから、約4km北上した所に城生柵跡がございます。そこから北西に約5km行ったところに、東山官衙遺跡が位置しています。2つの遺跡が作られたのは約1,300年前ですが、平城京や東大寺が作られた時代です。

城生柵跡と周辺遺跡

城生柵跡は周辺遺跡と2つから成り立っています。1つは城生柵跡で、昭和54年に国史跡指定されました。もう1か所は菜切谷廃寺跡(なぎりやはいじあと)です。こちらは城生柵跡の付属寺院と見られている遺跡で、昭和31年に県史跡指定されております。



城生柵跡全体図

まず、城生柵跡ですが、東西が約350m、南北が約370mあり、築地塀という土塀で四角く囲まれていました。この遺跡は多賀城が造られたのと同様8世紀前葉の造営で、およそ100年間機能しました。

築地塀は底の幅が約2.7m、それから推定した土塀の高さは約3mです。外側からは堀の跡が発見されています。北門跡は東西が8.4m、南北が5.1mの規模を持っていた門です。想定される門の形ですが、八脚門という大変格式の高い門ではなかったかと想像されています。

次は、実務官衙地区ですが、この遺跡の特徴は東西に細長く、長さが5間以上という大規模な建物があったことです。役所の中心となる政庁の位置は不明ですが、建物の

北側に鍛冶工房が東西に並んでいて、こちらには役所など実務的なことをするための建物を配置していたようです。

東側は正倉院地区ですが、南側に倉庫群、北側に倉庫を管理する管理棟とみられる建物が配置されています。4時期くらいの変遷があるようですが、東山官衙遺跡とこの倉庫群の建物の構造の変遷の仕方が、非常によく似ていることが分かっています。

菜切谷廃寺跡は、城生柵跡から約800m北東方向に行った所に位置していますが、正直なところ良く分かっておりません。寺院の金堂だろうと思われる基壇跡が1つ見つかっています。礎石の建物とその周りから瓦が大量に見つかっていますので、瓦葺の金堂だったであろうと想像しております。

東山官衙遺跡と周辺遺跡

次に、平成11年国史跡指定の東山官衙遺跡と壇の越遺跡、早風遺跡の3つの遺跡について説明します。これらの遺跡の位置関係ですが、東山官衙遺跡と早風遺跡は丘陵の上のほうにあり、壇の越遺跡はその南側に広がる水田地帯にあります。東山官衙遺跡を囲むように、2つの遺跡があり、発掘調査によりますと、東山



東山官衙遺跡・壇の越遺跡・早風遺跡の全体図

官衙を中枢とした一連の遺跡と考えることができます。

東山官衙の年代は8世紀半ばから10世紀前半くらいと考えており、城生柵跡と多賀城跡よりは10～15年くらい遅く造営されたようです。東西が約300m、南北が約250mで、丘陵部の台地の上に位置していました。

周囲を築地塀で囲われ、ちょうど遺跡を南北に2分するように沢沿いに大溝と呼ばれる溝によって、東と西に区画されており

東側が中心施設の政庁、

役人などが宿泊する施設の館(たち)、給食施設の厨(くりや)、鍛冶工房と実務的な官衙地区になっています。西側からは倉庫群が見つかっており、正倉院地区と考えられています。

南門は城生柵跡の北門と同じように八脚門でした。寸法は東西が8.5m、南北が6.4mで、梁のサイズなどから、2階建て門の可能性あることを建築家から指摘されています。政庁は一応5時期あったと考えています。一番古い第1期には、土盛の上に瓦葺の正殿があったようです。その後、東西南北とも50mから55mぐらいの四角い板塀に区切られた政庁が完成し、正殿を中心とし、脇殿がコの字型に配置されていました。

倉庫の礎石は、地主さんが畑を耕していたら大石とその周りから小さい河原石がきれいに並んで出てきて、これが発見のきっかけになりました。この石の発見がなければ、東山官衙遺跡の発掘調査はなかったと思っています。

東山官衙遺跡の周辺状況ですが、都市の整備ということで、8世紀中葉ごろの時代で、南に広がる壇の越

遺跡から、およそ1町(約110m)間隔で道路が発見されました。道路は南北方向が10条、東西方向が7条で構成されており、碁盤の目状の街が作られていたことが分かります。南北大路跡の道幅はおよそ6m、最大幅9mです。

その街跡から完全な形で役人または有力者の屋敷跡が見つかりました。55m四方の堀で囲まれており、その中に主屋(しゅや)2棟や給食施設の竈屋(かまどや)などの屋敷跡が完全な形で見つっています。

このような碁盤の目状の街の遺跡は全国的に見ても珍しく、発見例は平城京、平安京といった都、多賀城、九州の太宰府、伊勢神宮関連施設など地方でも最高クラスの遺跡群のみです。

多賀城が碁盤の目状の街を整備するのは、ここより50年くらいあとになりますが、国府より先に街を整備した理由は、東山官衙が陸奥国の一番西端にあたることから連絡路の拠点として、この地が重要視されていたからではないでしょうか。

8世紀後葉から9世紀前葉ごろ、蝦夷と律令国家の抗争がかなり激化し、最初に桃生城が襲撃され焼け落ちました。次に伊治城、そこから南下して多賀城、さらに出羽側の大室塞が襲撃され、かなり緊迫した時代状況になってきます。そういった時代のなか、東山官衙では役所とその周りの街を囲むように城壁が築かれたようです。山手のほうは土塁、下のほうは築地堀で囲われ、約100m間隔で櫓が設置されました。

最後に、戦争終結後、遺跡がどのような形で廃絶して行くかということですが、戦が9世紀前半に終結し、平和な時代が訪れます。それ以降は必要なくなったのか、ほとんどの遺跡が廃絶してしまいます。9世紀後半から10世紀前半になると一部にしか人が住まなくなり、最終的に役所が廃絶するのに併せて、こちらの人たちもいなくなるという状況です。

まとめ

先ず、律令国家による蝦夷政策の一環として、拠点となるべき城柵官衙が大崎平野を中心として造営されるなか、城生柵跡も誕生した。8世紀前葉ごろの多賀城も同時期です。そして、8世紀中葉ごろに多賀柵、出羽柵の連絡路開削のため陸奥国側の起点となるべき東山官衙と碁盤の目状の都市を造営した。その後、律令国家と蝦夷の抗争が激化し、都市を城壁で囲むようになった。9世紀前半に抗争が終結して、遺跡がどんどん廃絶して、城生柵、東山官衙も終焉を迎えることになった。

こういう状況が発掘調査から分かってきています。

[図出典] 城生柵跡の全体図は講演資料から抜粋。東山官衙遺跡・壇の越遺跡・早風遺跡の全体図は「壇の越遺跡～発掘調査の成果～」(平成21年10月20日 編集・発行 加美町教育委員会)より抜粋

講演Ⅲ

〔テーマ〕 大野東人が切り開いた色麻柵から大室塞に至る いわゆる「玉野新道」について

(講師) 白鳥 良一氏

はじめに

齊藤さんから城生柵跡、それから東山官衙遺跡、壇の越遺跡について、非常に詳しく説明していただきました。私どもは東山官衙遺跡を掘ったとき、まさかあれほど典型的な古代の都市、街並みが展開すると思ってもいませんでした。板垣さんという方が通報してくれたひとつの土台の礎石から、こんなにダイナミックな歴史の展開があったということを詳しく述べていただきました。そのほかにも古川で小寺遺跡という、城生柵遺跡みたいなものが見つっています。またすぐ近くに南小林(みなみおぼやし)遺跡というのがあり、火災で焼けた5棟瓦葺の倉庫が発見されています。これは養老4年(720年)の蝦夷の反乱に伴って焼かれたものじゃないかと考えられています。

私も大崎平野西部の歴史的な意味合いを考えてみました。まずは、この地域が多賀城から伊治城、胆沢城へと向かう東山道と、陸奥国府多賀城と出羽国府秋田城を結ぶ交通の要衝であったという点であります。この地域は北と西が蝦夷の領域で、奈良時代までは政情が極めて不安定な地域だったので、ここに律令国家の蝦夷政策が非常に具体的に表れていると思います。城柵がこれほど群集した地域はありません。それが律令国家の最前線としてのこの地域の特殊性だと言えると思います。

それから、東国とか陸奥国南部から大量の移民が来ていて、その時代の集落跡から武威国とか上野国とか上総国、現在の東京、埼玉、千葉あたりで使われた土器がたくさん出てきます。これはその時代だけで、2、3代後になると関東系土器は全く見られなくなります。移民たちはこちらの文化に同化して、生活するようになったと考えられます。また、関東地方の国や郡の名前と同じ古代の郷名がこのあたりに存在しています。

陸奥における古代の道

陸奥における連絡路と古代の道、駅家(うまや)について考えてみましょう。

大野東人についての記録から見ると、2月19日に藤原麻呂という指揮官が多賀柵に騎兵1千人を率いて到着。2月25日に東人、騎兵196人を連れて多賀の柵を出発。4月1日、東人、5,944人の兵を率いて色麻柵を出発し、その日のうちに大室駅家に到着。

さらに、4月3日、東人が道を開きながら、大室駅家から進攻。4月5日に比羅保許山(ひらほこやま)に駐屯、そこで出羽守田辺難破(たなべのなにわ)が、これ以上奥地に進むと、蝦夷が山に逃げてしまうので、今はやめたほうがいいと諫めて、4月11日に多賀城に帰ったと詳しく書かれています。

ここで問題になってくる点として、東人が2月25日に多賀柵を出発し、その後、色麻柵を出て大室駅家に行く4月1日まで、1か月以上も何をしていたのかという疑問点が、以前から出されていました。3月1日の間違いとする説もありますが、最近では、2月25日から4月1日までの約1ヶ月間、東人は色麻柵から大室駅家に至る新しい道路の開削に当たっていたから、1日で軍を率いて大室塞まで行ったのだらうとなってきました。新解釈が出てきたわけです。このことは、『続日本紀』天平9年の条に「石をきざみ、樹を切り、谷を埋め、峯を削って」新しい道を切り開いたと書いてあることから窺えます。

あと、東人の作戦中止ですが、厳しい気候で馬に食わせる餌もない、気候がよくなってから攻めたほうが良いと引き返した言い訳と、田辺難破が蝦夷をこれ以上刺激すると大変なことになるからやめたほうが良いと言ったためと2つ書いてあります。中央に報告する方の理論として向こうで納得してもらえるような理屈をこねながら中止したということで、全部が全部、事実として受け入れることはできないと思います。

今度は、陸奥・出羽連絡路がどこを通過していたのかですが、『続日本紀』の天平宝字3年(759年)9月26日の条に「出羽国雄勝、平鹿の2郡、それから玉野、避翼(さばね)、平戈(ひらか)、横河、雄勝、助河、並びに陸奥の国嶺基(れいき)、等の駅家を置く」という短い記事があります。この時、秋田県の横手盆地を制圧し、雄

『延喜式』諸国駅伝馬条
陸奥国駅馬伝馬
雄野。松田。磐瀬。葦屋。安達。湯日。峯越。伊達。柴田。小野各十疋。
名取。玉前。栖屋。黒川。色麻。玉造。栗原。磐井。白鳥。胆沢。磐基。
各五疋。長有。高野各二疋。



木下良「日本古代の道と駅」より
陸奥・出羽の古代交通路

勝城を作ったことで、大野東人が開削しようとした陸奥・出羽連絡路がようやく実現します。これを指揮したのが多賀城の第2期を造営した藤原朝獺(あさかり)です。雄勝城は今の払田柵だと私は思っています。そして色麻柵から秋田城に至る道路を整備し、その道沿いに駅家を設置しました。

このなかの嶺基という駅家ですが、後の延喜年間に作られた『延喜式』には出てこないのも、あまり注目されていなかったのですが、20年くらい前、高橋富雄先生の論文に、「嶺基はこの連絡路に置かれた駅家と見たほうがいい」と短く触れていてびっくりしました。ちょうど東山官衙遺跡を掘っていたころでしたので、嶺基駅家は陸奥・出羽連絡路を探りあてるときの、キーポイントになる駅家だとずっと思っていました。

嶺基は『延喜式』には出てきませんので、それまでには廃止された駅家だと思われます。しかも、横手盆地を通る駅家はすべて『延喜式』には出てきませんので、このルートも含めて廃止されている可能性があります。些麻呂(あざまろ)の乱など幾つもの戦乱があったので、おそらく元の蝦夷が支配する地域に変わっていった結果だろうという気がします。

古代駅路の特徴と探索

かつて長野県で東山道(とうさんどう)研究が盛んでした。その当時は、古代の道路は、自然地形に合わせた道を少し立派にしたぐらいと考えられていました。

ところが最近各地で発掘調査が進み、古代の駅路の特徴は、基本的に直線で、屈曲する場合は直線的に折れ曲がる特徴があること。また独立した峰とか山脈とか台地の突端など、遠くに見える目標物に向けて道路を作る場合があり、屈曲した水路とか自然地形、海岸線に沿って駅路が通ることはほとんどないことなどが分かってきました。

道の探し方ですが、国境とか県境とか郡境とか、行政区画の境がまっすぐになっているところは、当時道路があった可能性があります。それから、山道、大道、立石、駅などの地名も参考になります。明治の地形図とか第2次大戦後直後の航空写真とかも見たほうが良いです。道幅は平安時代は約12m、奈良時代になると6mぐら이가多くなるようです。

駅家の遺跡というのは、全国でもほとんど見つかっておりません。原則として30里(約16km)に1駅置くというように決められていますが、地形が急な所とか水とか牧草が無い所は、適宜距離を調整しなさいと書いています。駅家の場所ですが、道の屈曲点とか交差点、川を渡る地点など交通上の接点に設置するケースが多く、災害に強く安全な所、泉や井戸など豊かな水源がある場所が選ばれている特徴があるようです。

実際に駅家が確認されているのは山陽道と西海道の大宰府です。この地方では瓦が出てくれば、駅家があったかもしれないという決め手になりますが、東山道ではそういうわけにはいかないのも、硯とか駅長とか駅子という駅家の役人の書いた墨書土器などの文字資料が出てくれば、そこに駅家があった可能性は高いと言えます。この地方では、道が想定される場所で土師器(はじき)、須恵器(すえき)などの古代の土器が出るようだったら駅家の可能性もあります。

嶺基という駅家を探すとすれば、まずは古代の道筋から探していくべきです。例えば、軽井沢越のルート上には、軽井沢遺跡と軽井沢番所跡があり、駅家の候補として考えられるかどうか分かりませんが、直線的または屈曲する道を見つけ出し、地境なんかを参考にしながら考えてみたらどうでしょう。直線的な切り通しとか溝状の窪みがあるときは、古代の道の可能性があります。駅家はある程度の建物が必要ですから、一定の広さをもつ平坦地が要ります。賊に襲われることを考え、ある程度の防御性も持っていたでしょう。

こういうことを基準にして、陸奥・出羽の連絡路だけじゃなく、陸奥国内の古代の道路を探していくことが必要じゃないかと思っております。

[図出典] 講演資料から抜粋。

発掘調査での思い出について

【安 藤】 ありがとうございます。齊藤さんへ質問ですが、壇の越遺跡の碁盤目状の都市づくりというのは、国府多賀城の街よりも50年くらいも早かったということをお話いただきました。こうした遺跡の発掘に関わっていらして、楽しかったこと、苦しかったこと、資料に書かれていないエピソードがあればお聞きしたいと思います。

【齊 藤】 楽しかったことですが、やはり碁盤目状の街が見つかったことです。遺跡の端から順番に、中枢部に向かって発掘調査を始めて2年目くらいに、これは間違いないだろうという道路跡が発見されました。3年目くらいにまた道路らしき遺構が出てきました。冬期に図面整理している時、図面をつなぎ合わせて線を引いてみたところ、1町という単位で線が引けて驚きました。次の年も予想どおり道路が出てきてすごく興奮しましたが、その後は、また出た、また出た、の連続でした。本当に楽しかった思い出です。

反面、苦しかったのは壇の越遺跡は、ほ場整備事業と県道改良事業に伴った発掘調査でした。発掘調査が進んだため、2年で終わる工事が15年ぐらいかかってしまいました。町民の方にはすごくご迷惑をかけしてしまい、「まだ終わんないのすか」と聞かれると、「すみません、すみません」「もうちょっとかかります」と謝りながら進めたことです。

蝦夷政策から見える東北について

【安 藤】 白鳥さんにお聞きします。本日は多賀城、伊治城などの歴史的な意義を、東山官衙遺跡とあわせてお話いただきましたが、そういった蝦夷の政策から見える東北について、白鳥さんのお考えをお聞かせください。

【白 鳥】 多賀城研究をやっていると、古代の城柵が何のために作られたのかをいつも考えます。城柵



という律令国家側が作った施設の歴史を調べていると、中央政府のことがばかり調べていると思われがちですが、実はその裏を返せば蝦夷といわれていた、東北の住民たちがどうであったのか、ということが分かってくると思っています。

また、大野東人が開削した道路は実際どこだったのか、それによって陸奥側と出羽側でどのような人的・物的交流があったのか、ということを考えると、非常に重要な課題として、連絡路の探索が大きく浮かび上がってきました。皆さんの中にも、道がどこを通過していたのかについて、いろんなご意見があると思います。今の段階ではどこという決定打はひとつもないわけですから、先ほどのようなチェックポイントを頭に置きながら、これからみんなで探していけたら、きっと面白い展開が出てくるという気がしています。

地域づくりにどのように生かすのかについて

【安 藤】 地域における歴史の重要性がいろんなものと比較していくとさらに見えてくる。この地域の歴史といいましても未だ確定したものではない。諸説あるものに対して、歴史を振り返りながら議論していただくことが重要だというご指摘でしょうか。

そこで、地域の方々が何を学び、それを地域づくりにどのように生かしていくべきかという点について、お二人にご提案をいただきたいと思います。

【齊 藤】 工事の関連で、壇の越遺跡の発掘調査をしましたが、本当に地域の方々にはご協力いただいて、工事では遺跡を極力壊すようなことがないような形で進めていただきました。そのために工事費用等いろいろかかってしまった経緯もございますが、遺跡に対して皆さんにご理解いただき、事業が進められたことを感謝申し上げます。また、東山官衙遺跡に対しても、公有地化を進め、町有地という形になっており、地域の方に管理等お願いして、地元に着した形で遺跡の活用をしていただいております。

今後もいろいろ、地下で眠っている町の宝をどんどん活用していただき、「うちの町にはこういったすごいものがある」のだという地域の誇りとして、地域づくり等に生かしていただければと思っております。

【白 鳥】 東山道の研究は、宮城県は遅れています。しかし様々な発掘事例も出てきましたので、これからだと思っております。私が小さい頃に比べたら山が荒れ、新しい道を見つけるのは困難になってきました。しかし、まだ戦前生まれの元気な方々がおられるので、山の中に直線の道がなかったかなどの聞き取り調査がなんとかできると思っています。その情報をもとにして、探索して歩くことを急がなければと考えております。

山とか地形とかは地元の人たちが一番詳しいので、地元の人たちを中心にして、大いに調査を進めていただきたいと思います。先ほど話したように、郷土史家の板垣さんからの情報で東山官衙遺跡が発見されました。さらに、渋谷さんという地元の方が土器をいっぱい持っていて、それが壇の越遺跡発掘の契機となり、街並みの発見という大きな成果に結びつきました。幸い地元のことを良く知っているたくさんの方々が街道研究に関心を持っておられるようなので、是非、陸奥・出羽連絡路や嶺基駅家の探索をお願いしたいと思っております。

まとめ

【安 藤】 貴重なご提言ありがとうございました。最後のまとめをさせていただきます。

本日のお話をお聞きいたしまして、城生柵跡や東山官衙遺跡・壇の越遺跡が、東北の歴史を考えていく上で、非常に重要な位置づけにあるということがよく分かりました。そういった意味でも、さらなる調査研究、保存と活用の検討をしていく必要があることを痛感いたしました。

一方、陸奥出羽連絡路のいわゆる玉野新道について、これまでいわれてきた軽井沢越最上海道とは、別の道路である可能性も否定できないというお話がありました。

歴史や文化というものは、縄文時代からでも1万年もその土地に営まれてきたものです。地域についての正しい歴史認識というものが地域の誇りとなります。これからの生き生きとした暮らしになるような地域づくりに繋げていくため、自らの地域とその歴史を知るという活動を私どもも続けてまいりたいと思っております。地元の方々にも、最後の白鳥先生のご提案のように、是非一緒に励んでいただければと思っております。

それでは、最後になりますが、いわゆる玉野新道について諸説あります。しかし、近世の軽井沢越最上海道は、歴史的にも、また自然的にも豊かな素晴らしい街道ということには変わりがございません。その辺の所を含めて高倉会長に本日の締めくくりをお願いいたします。

【高 倉】 私の街道との付き合いは、主として近世、江戸時代を中心しております。ところが街道は県境で切れずに隣の県まで続きます。藩を越えて街道は続いています。それから時代的にも遙か以前から受け継いでいるわけです。私は、中世・古代の道について、あまり触れないことにしているのですが、触れざるを得なかった1つの例を申し上げます。

今日は玉野新道の背景を含めていろいろ語っていただきましたが、私がこの道に関心を持ったのは、



菜切谷廃寺や城生柵跡にちょっと行ってみようかと思って、ゼンリンの住宅地図をめくって、場所を探したわけです。そうしましたところ、住宅地図に出羽道という地名が、出羽道1、2、3と出羽の方に続いていました。また、山道というのも1、2、3という形で、ちゃんと地図の中に出ておりました。そうした出羽道をたどれば、玉野新道なり、東山官衙遺跡なりに通じるのかなと思ったのが興味の始まりでした。

江戸時代のはじめに宿駅制度というものができました。したがって、宿駅制度でかなり綿密な調査が過去に行われているわけです。例えばその典型的なものは、仙台市博物館の正面に大きな地図があります。あれは「正保の国絵図」と言いまして、そこには宿場、宿場の距離が全部書かれていますが、あれは大変な仕事だったと思います。そういう資料がある上に、昭和50年代に「歴史の道調査」という街道調査を文化庁から依頼され各県で行いました。これも素晴らしい調査資料となっています。そんな資料をみながら、「仙台領のあの街道を歩いてみようかな」ということで始まったのが、拙著の『仙台領の街道』でございました。

また、江戸時代の街道には紀行文などずいぶん資料があります。旧宮崎町切込のほうに湯の倉温泉がありますが、あの温泉を訪ねた『湯の倉紀行』という天保12年の記録もあります。その紀行文の作者は画家でもあったようで、絵も良いのです。私のホームページの中に資料として残していきたいということで載せてあります。

調査、学問だけでなく、明日の企画のように、歴史や自然を楽しみながら歩くのも、この街道交流会の楽しみの一つでございます。明日皆さんと歩けないのが非常に残念ですが、よろしくお願いをしたいと思います。

【安 藤】 会場の周りに、みやぎ街道交流会など東北各地の街道団体の調査、活動紹介のパネルや街道マップ、作成したパンフレットなどを展示しております。その中のひとつ「とうほく街道会議」という団体は、先ほど話に出ました故・工藤雅樹先生に会長をしていただいております。

工藤先生は「本当の歴史は、机の上にあるのではなく、それぞれの地域の大地にこそあるのだ」と生前よくおっしゃっていました。工藤先生の想いを私たちは受け継ぎながら、街道活動をしております。そういった意味で東北各地における現地活動の様子を展示しております。皆様、お帰りの際に、また休憩の時にごらんいただければ幸いです。本日はありがとうございました。



活動報告

街道に関する活動団体にその活動内容を報告して頂きました。

報告 I

最上海道研究会の活動

会員 藤井 慶吾 氏



「最上海道研究会」は、平成20年11月の設立以前から最上海道に関わるグループや個人が活動していました。その発端となるのが、平成18年10月3日、山形県村山市の「袖崎地区市民センター」の皆さんが加美に来町して、最上海道による交流について相談が行われました。そして、10月15日、袖崎地区公民館主催の「最上海道散策研修会」が、上ノ畑から漆沢まで歩いて来られ、加美町長ほか関係者と意見交換が行われました。

その時、加美町長さんが、「山形から2度も山を越えてきてくださったので、次はこちらからお訪ねしなければならない」との力強い話もありました。その3日後、加美町長、尾花沢市助役などの有志が、海道駐車場から上ノ畑まで歩きました。

平成19年には、10月7日に「秋のウォーキング」が小野田公民館により開催され、漆沢から上ノ畑まで歩き、河北新報に大きく掲載されました。このような折、郷土史家の本田一郎さんが日頃の調査研究の集大成として『甞れ！最上海道』を自費出版され、その発刊祝賀会が11月17日に開催されたことが、特筆すべき事項としてあげられます。そして、翌年の3月1日、文化財講演会を小野田地区文化財友の会が開催し、本田一郎さんに熱弁を振るっていただきました。

平成20年5月24日、小野田公民館主催で「春のウォーキング」が行われましたが、県境付近の湿地に苦勞させられ、整備の必要性を痛感いたしました。6月15日には、石舟や助け小屋などの著名箇所の確認調査が有志により行われ、木の小杭設置作業を実施しました。8月5～6日には、「軽井沢越大室研究会」との交流会が村山市で開催され、活動報告・意見交換や視察を行いました。9月1日に「最上海道研究会」の会員募集が開始されました。10月12日には、小野田公民館主催の「最上海道散策会」が実施され、軽井沢番所跡において、大室研究会から山形のいも煮をご馳走になり、その美味しさに大感激したことが忘れられません。そして、11月29日、「最上海道研究会」の設立総会を開催しました。会長に吉岡博道氏、副会長に渋谷傳氏など役員が選出され、会員32名でスタートしました。その時、本田一郎さんに「最上海道ウォッチング」と題して講演をいただきました。

平成21年には、4月25日に総会と第1回研修会を実施し、山形側でいう「仙台街道軽井沢越え」と題して、尾花沢の梅津保一氏からご講演をいただきました。6月7日、研究会主催の「初夏の最上海道ウォーキング」では、私どもの研究会、みやぎ街道交流会ほかの計3団体(約80名)を大室研究会の小松会長・平山副会長が県境付近で出迎えて交流しました。



最上海道は、湯殿山などへの参詣の道でもありましたので、平成21年10月4日と平成22年9月19日の2回現地研修会を実施しました。2回目は、湯殿山神社本宮までの道をマイクロバスで訪ねています。

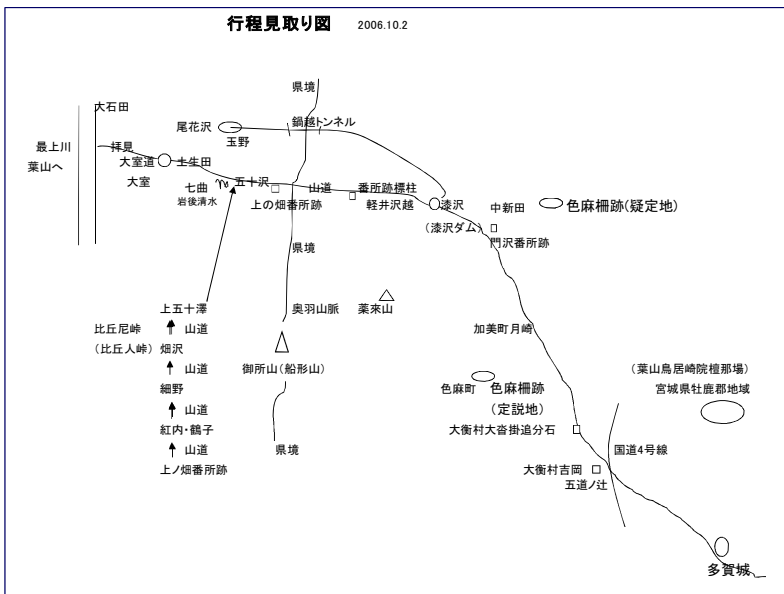
それから、平成22年2月28日には、会員の「自主研究発表会」を開催し、「芭蕉さん一行も歩こうとしていた軽井沢越最上海道」、「大野朝臣東人の歩いた道」、「中羽前街道開鑿の経緯」の3題が発表されました。4月25日の総会では、みやぎ街道交流会高倉会長に講演をいただき、この時会員は52名となっています。6月6日には研究会主催の「初夏の海道ウォーキング」、9月12日は来年度行動計画に向けた今後の海道整備などについて会員有志で話し合っています。

私ども研究会は、研究・交流・散策という3つの目標を設立時に掲げており、今後も充実した内容で研究や活動をしてまいりたいと思いますので、皆様のご支援をよろしくお願いいたします。



山形県村山市の大字土生田(とちうだ)から参りました。私どもの「軽井沢越大室研究会」では、いままで足掛け6年間に、80項目くらいの活動を行ってきました。それをすべて話すことはできませんので、今日は私どもの考え、並びに検証結果の報告ということで、多賀城から大室に至る道筋、大室に関する事などをお話したいと思います。

私どもの大室研究会は学術的な研究ではなく、古道を訪ね歩くという体験を研究姿勢としています。今まで、宮城、秋田、新潟と、大室に関係する所を歩いてきました。また、歴史の道に関わる近隣の方々との交流も重要視しています。



実際に体感するため、土生田から多賀城までの軽井沢越えの最上街道などはどういう道なんだろうと思って、3回に亘って歩いてみました。ただし、宮城県吉岡の五道ノ辻あたりから多賀城までは、歩くと危険なので、一部バスを使いました。

大室の道を昔は大室道(おもろみち)と呼んでいました。左図の左側に大室道、土生田、さらに右側に七曲、五十沢(いさざわ)とあります。この五十沢から山道に向かって畑沢、細野、紅内(くれない)鶴子、上ノ畑番所に行くわけです。細野の92歳の古老が20歳の頃にマ

イタケを取りに軽井沢方面に歩いていったと聞き、この道は間違いなくあったのだと感じました。私は細野まで確認していますが、それから先も歩けるようにしたいと思っています。

大室駅探求のため、地名など多方面から調べています。明治21年の地積図や明治34年測量の5万分の1地形図と照合し、最上川から続く道を確認しました。この最上川付近一帯は、拝見・元木・落合遺跡があり、縄文、奈良、平安期の須恵器などの土器が無数に出てきます。道の跡も発掘されている所もあります。

群馬県前橋市に国史跡大室古墳群があり、古代の大室は地方豪族の古墳(墳墓)であることが判明しました。関連して、明治の5万分の1地形図の大室付近を見ていたら、桜の花びらのような記号あり、分からないので国土地理院に照会した結果、「堆土」(だいで)といて「土が盛り上がった所」だということで、大室にも古墳があったかもしれないと考えています。

また、袖崎本飯田の熊野権現の由来を記した安達家文書に「越後国蒲原郡十三座ノ内土生田神社在り元正天皇の御代(西暦720年前後)越後国民を出羽に移住せし時土生田村と称する村里出来しならん」という記述が見つかり、確認の結果、延喜式内社として新潟県南蒲原郡田上町羽生田に土生田(はにゅうだ)神社が存在していることが判明し、何回か訪ねています。言葉など民俗の共通性があることが分ったり、平安末期の地図に土生田があり、今の新潟市役所付近だということです。現在、新潟大学の先生が研究しているということで、期待しているところです。

これまで字大室からの考古出土物がなかったのですが、平安初期の須恵器破片を1個発見して、最上川沿いまでの古代遺跡分布が繋がったと考えています。

このような体験をもとにして、いろいろ活動してきました。私どもだけの街道研究ではなく、今後とも皆さんと一緒に活動していき、有意義な空間を作れればと思っています。



活動報告の前に街道との出会いをお話させていただきます。栗原市では「くりはら田園観光都市創造事業」といって、地域の資源を活かして人と人との交流ができるような観光産業を創ろうとしています。

栗原市内には、奥州街道、佐沼街道、小安街道、文字街道、羽後岐街道、そして芭蕉の通った上街道の6本の街道が通っていますので、これをどの様に地域おこしに役立てようかということで活動が始まりました。

最初が平成19年8月、みやぎ街道交流会の協力を得た「奥州街道を歩いてみる会」でした。大崎市境の高清水から一関の旧国道までの約37kmが対象でした。街道歩きは、大型バスで来てたくさんお金を落として貰うという考え方ではなく、少人数でかまわないので、好きな方にゆっくり雰囲気や歴史・文化、食文化を味わって頂き、栗原を知って貰おうという考えのもとにスタートしておりますので、この時は、昼に郷土料理のはっと汁を食べました。その次に、街道の活かし方を検討しようと、好きなメンバー8人で街道食談義を開きました。更に、地元の人たちにもっと奥州街道を知って貰おうと思い開催したのが9月の「奥州街道探訪会」で49名の参加者がありました。今後、更にこの取り組みを進めるためには組織が必要だということで、平成20年2月、約10人のメンバーで「くりはら街道会議」がスタートしました。

我々の街道会議がここまでくるには「みやぎ街道交流会」や「奥州街道会議」の方々が大変お世話になり、一緒に青森、岩手、栗原を舞台にした街道ツーリズムネットワークという事業にも取り組みました。栗原だけという一つのエリアでなく線として活動していこうということで、いろいろ後押ししていただいております。

その中で、人と交流し、栗原の街道を歩いていただくために、街道環境の整備や案内ガイドの養成も必要と考え、ガイド養成講座を4回開催しました。地域の資源を勉強しながら、その資源を個々の人にも伝えていこうということです。ここで重要なのが食です。地元の商工会婦人部の方々にお昼を作ってもらって交流会を行ったのですが、この様に間接的でも地元にお金を落としていただくということも活動の基本にあります。

37キロの奥州街道を全部踏破したのですが、藪がひどくて歩けないところが何カ所かありましたので、昨年12月19日、雪の中で刈り払い作業を行いました。呼びかけに応じて草刈機やチェーンソー、鎌やなたなどを手にして集まった人が60名でした。刈り払いが終わって、蘇った街道を歩いたときは、感激でした。



この様にして、奥州街道の歩けない部分にチャレンジしてきましたが、今年の11月20日、藪がひどくて歩けない最後の区間、一関市の旧国道4号タッチ部の鬼死骸地区の刈り払いを行います。これは一関の方々との合同作業になります。さらに街道を歩く方々のために、道しるべの設置も計画しています。

事務局では、皆さんに歩いて楽しんでもらうことを基本と考えています。更に、そこから地域に新たなビジネスが生まれれば良いなと思っております。そのため、街道の駅・宿・茶屋・市として、街道を歩きながら泊まる場所、休む場所、食べる場所といった情報を入れたマップも併せて提供しようと計画しています。

街道を歩く方々をいかにおもてなしをするかという迎える側の体制として、地域の方々に「くりはら街道会議」を設立し、活動していこうということです。

最後になりましたが、2年半前の岩手・宮城内陸地震の際には、皆さんにご支援をいただき、本当にありがとうございました。道路も復旧しましたので、栗原の街道を是非歩いていただきたいと思っております。

パネル展

会場の両サイドには、街道の活動に関するパネルの展示を行うとともに、パンフレットや街道マップなどの配布を行いました。

団体名	パネルの内容	枚数
おおさき古道調査プロジェクトチーム (宮城県北部地方振興事務所)	「おおさきの古道」への案内	8
とうほく街道会議	とうほく街道会議の紹介、「出羽の古道六十里越街道」ポスター	3
みやぎ街道交流会 NPO 法人奥州街道会議	奥州街道における街道ツーリズムへのチャレンジ	4
みやぎ街道交流会	団体及び活動の紹介	3



街道3団体のパネル



「おおさき古道調査プロジェクトチーム」のパネル

街道談義

加美地域の郷土料理と県内などの地酒により交流を深めました。



吉岡会長のあいさつ



郷土料理



地元の3銘柄



恒例の地酒自慢



乾杯！



地酒の味は？



鮎のお吸い物！！



夜遅くまで二次会

街道探訪会

Aコース

軽井沢越最上海道

※歩行距離約12km(前後はバス利用)



漆沢・山神神社前 (9:15)



桐ヶ窪坂 (9:35)



高畑大明神碑 (10:20)



ブナ林の中の海道 (10:40)



長沼林道からの遠望 (11:15)



名月峠の湯殿山碑 (12:50)



軽井沢番所跡 (13:15)



天沼 (14:15)



完歩の記念撮影 (15:00)

※ () 書きはおおむねの時間を示す。(なお途中昼食は12:00~12:30)



中新田城跡(町指定史跡)



中新田城跡・斯波家兼公銅像



城生柵跡(国指定史跡)



賀美石公民館・東山官衙遺跡の資料室



壇の越遺跡



松本家住宅(国指定重要文化財)



昼食・中新田公民館

参加者の状況・アンケート結果

参加者の状況

- ・ 総参加人員は94名と100名を超えるという目標よりは、少なめであった。なお、みやぎ街道交流会会員は34名と総参加者の36%を占めている。
- ・ 一方、街道談義、街道探訪会の参加者は、募集定員とほぼ同数となった。
- ・ 地域別で見ると、仙台市内からの参加者が32名、34%と多く、加美町内からの参加者が23名、25%と少なかった。

〔内容別内訳〕

全体	一般	会員	計
第1部: 交流大会	55	30	85
第2部: 街道談義	25	25	50
街道探訪会: Aコース	13	11	24
Bコース	18	17	35
宿泊者	13	23	36
延べ参加者 (重複を除く)	60	34	94

〔地域別内訳〕 N=94



※ 会員数には、個人会員のほかに、団体会員の所属団体の複数参加者(3団体5名)も含む。

参加者アンケート結果

◆ 交流大会

〔属性〕

- ・ 参加者の32%、27名からの回答があった。うちみやぎ街道交流会会員は41%である。
- ・ 参加者の代表的な属性は、男性(82%)で、年齢は60代(56%)、職業は無職(41%)、仙台在住者(37%)である。

回収状況



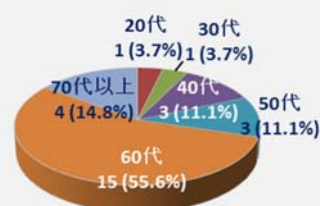
◇ 会員



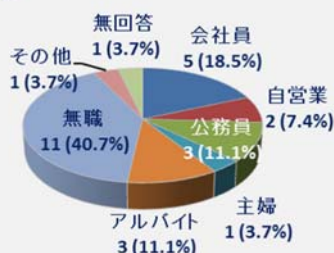
◇ 性別



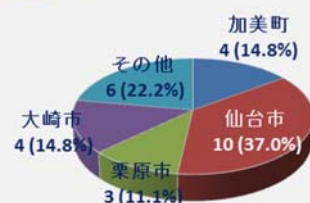
◇ 年齢



◇ 職業



◇ 住まい



※四捨五入の関係で合計が100%にならない場合がある。

【集計結果】

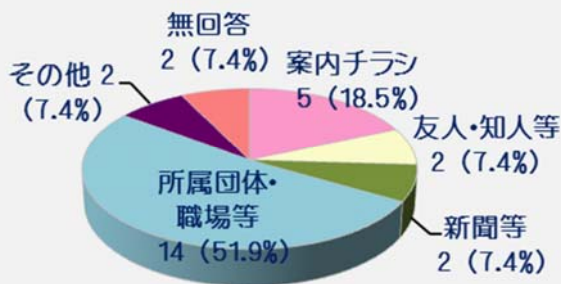
- ・開催は、52%が所属団体や職場等で知ったとしている。次は、案内チラシが19%となっている。
- ・基調講演・鼎談については、85%が大変良かった・良かったと答えている。
- ・活動報告は、78%が大変良かった・良かったと答えている。
- ・翌日の街道探訪会には、両コース併せて67%が参加するとしている。
- ・自由記述の中で主なもの

基調講演・鼎談：地域の歴史は大切にしなければ豊かに生きられないと思う。／街道から宮城県の古代の歴史を学ぶ事が出来て良かった。／東山道官衛遺跡の条里制の街などには感銘を受けた。／身近にこんなに素晴らしい歴史的遺跡があることを誇りに思いました。

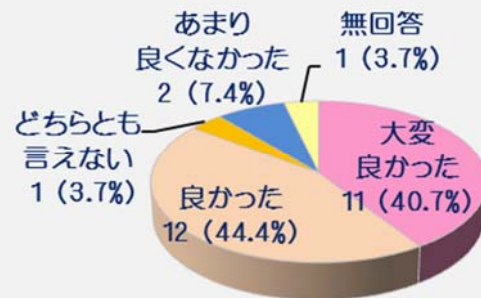
活動報告：実に多くの活動があり、今後が楽しみである。／各々熱心に活動されている様子が伝わって来た。／想像以上に活動の実績を持っておられるのだと感心いたしました。各年の活動回数も多く、あらためて街道に関わって活動されている方々の数の増加を実感しました。

参加した感想・意見：実際の地域を訪れてその地の歴史と現在に触れることでまた1つ興味を持てる地域、少し歴史の一端が垣間見られた地域が増えました。／各地にあるそれぞれについて研究・調査されて自らの会の発表や地域への想いを強く感じられました。／他にも用事があったが、参加してとても良かったと思う。もっと沢山の人が集まると良かったですね。／東北の古代の新たな姿をみた。／年に1回は是非、この様な大会を開催してほしい。／正直言って分かりづらかったです。(自分の勉強・知識不足の為)今後そのような会があったら進んで参加し勉強してみたいです。

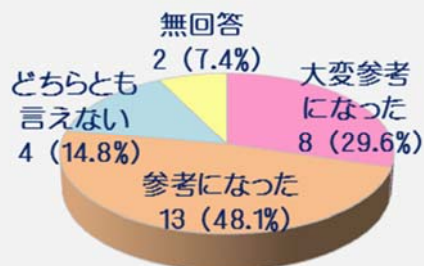
問1 今回の開催を何でお知りになりましたか。



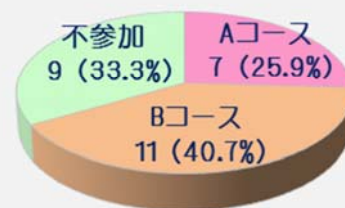
問2 「基調講演・鼎談」の内容はいかがでしたか。



問3 「活動報告」の内容はいかがでしたか。



問4 明日の探訪会には参加されますか？



※四捨五入の関係で合計が100%にならない場合がある。

◆ 街道探訪会

- ・内容について、Aコースは全員、Bコースは82%が大変良かった・良かったと答えている。
- ・自由記述の中で主なもの
 - Aコース：一人ではなかなか行けないコースで、ガイドの話も興味深く大変ありがたい企画でした。
 - Bコース：かねてから関心のあった遺跡群をまとめて見学出来、また解説も適確で大変勉強になりました。／地元に住んでいても中々、行けない所へ行く機会を企画して頂いて良かったと思います。／全然知らなかった東山官衛遺跡の説明に感動した。

	Aコース [回収 N=13 (54.2%)]	Bコース [回収 N=21 (60.0%)]
性別		
年齢		
職業		
住まい		
内容		

※四捨五入の関係で合計が 100%にならない場合がある。

「みやぎ街道交流会」とは？

みやぎの地は、自然、歴史、文化、風土などの豊かな地域資源があり、中でも街道と舟運は、みやぎの各地域をつなぎ、地域の発展に貢献してきました。

「みやぎ街道交流会」では、これらの地域資源等の保存、持続可能な活用を通じて、地域づくりに取り組む各種団体や人々に呼びかけ、心豊かで誇りあるみやぎの地域づくりに貢献することを目的として、平成19年5月に設立いたしました。

具体的には、県内及び東北各地の街道関連団体との交流・連携の実践や支援、地域資源の保存・継承のための探訪会や研修会・交流会を開催するなどの活動を行っています。

宮城県内で街道や舟運に関連して地域活動をされている方、街道や舟運に興味のある方、歴史を感じながら心地よい汗を流したい方、交流会でワイワイやりたい方のご入会をお待ちしております。

[お問い合わせ先]

みやぎ街道交流会 事務局

〒980-0014 仙台市青葉区本町1丁目 13-32 オーロラビル 606号

TEL022-722-3380 FAX022-722-3381 E-mail:miyagi-kaidou@auone.jp